

浄土教における妙法思想

菊 村 紀 彦

妙法といえ、直ちに「妙法蓮華經」を思い出すが、本論文では、浄土教の場合に限定して、この幽玄なる哲理語を考察したい。妙法は、一般に梵語の *Saddharma*、巴利語の *Saddhamma* の漢訳として知られている。妙に当る部分は *sat* で「正」とか「善」を意味し *dharma* は、無論「法」である。かつて竺法護はこれを「正法」とし、鳩摩羅什は、「妙法」を採用している。妙の方が、正よりもより深遠で、玄または妙につくり、言亡慮絶・思弁を絶する——不可思議なる表現といえよう。

浄土教でも、浄土真実の法を、また、阿弥陀仏の智慧・慈悲による廻向や教法を「妙法」と呼んでいる。「無量寿經」下巻では「無量寿仏為諸声聞菩薩大衆班宣法時、都悉集会七宝講堂広宣道教、演暢妙法」とある。ここでの「妙法」は、前掲の意味であることは明白だが、但し、梵語原典にこの項は存在しない。中国伝来、このことばは、宗教の極地を表現するために多く使われている。それからあらぬか、梵語原典の

見当らぬ、中国成立説の濃い「観無量寿經」には多く登場し、宗教的効果を昂める役割りを果している。「勢至観」では分身の阿弥陀仏や観音・勢至が「皆悉雲集極樂国土、側塞空中坐蓮華座演説妙法」とあり、「苦の衆生を度し」ている。次の「普観」では「水鳥樹林及与諸仏所出音声世皆演妙法」とある。また、「九品往生」の上品上生には「生彼国已見仏色身衆相具足」、「見諸菩薩色相具足、光明宝林演説妙法」とあり上品下生では「聞衆音声皆演妙法」とあり、下品下生では「不善業の五逆十惡をつくつても、その臨終で善知識に遇い」、「種々安慰為説妙法」、念仏を教えられれば浄土往生できるという記述がある。まさに浄土教の面目である下根の者の往生浄土の道がこの「妙法」に象徴されているのではあるまいか。なお、ここで注目されるのは、「演」という字である。「妙法」は、演べられ、説かれるのである。広く流通せしめる心がこめられているのであろう。

日本浄土教の特質は、仏教思想の演繹であるが、親鸞もそ

の例外ではない。いや、むしろ自内証の世界を多く披瀝している。それが親鸞浄土教を現代にまで昇華してきた源泉ではあるまいか。親鸞の場合「妙法」だけで考察してもかなりの独自性を持つている。「教行信証」で、この二字が引用されているのは、信巻の二箇所に過ぎない。「無量寿如来会」下巻から「如是妙法已聴聞、常令諸仏而生喜」と善導の「往生礼讃偈」から「専称名号至西方、到彼華台聞妙法、十地願行自然彰」という部分である。また「讃阿弥陀仏偈和讃」では「相好ごとに百千の ひかりを十方にはなちてぞ つねに妙法」ときひろめ 衆生を仏道にいたらしむる」と謳っている。

もつとも、この和讃は、曇鸞の「讃阿弥陀仏偈」の和訳であるから、親鸞の純粹オリジナルではない。ここで挙げた「妙法」が、浄土の教えそのものを指すことは分明であるが、親鸞の思考した妙は、かならずしも「教法」だけではないのである。この師の妙観には、仏身等が存在しているのではなからうか。「教行信証」行巻には「弘誓の一乗海は、無礙、無辺、最勝、深妙、不可説、不可称、不可思議の至徳を成就したまえり」という記述が見られる。ここでの深妙は注目に価するものと思う。その出典を探索すれば、恐らくは「無量寿経」上巻の「歎仏偈」ではあるまいか。「人雄獅子、神徳無量、功勳廣大智慧深妙」のガータであろう。また、「無礙、無辺、不可説、不可称、不可思議」は、同じく上巻の十二光

の影響かと思われる。

さて、かの「歎仏偈」の梵語原典では、深くという形容のもとに *gābhīrā*⁽³⁾ 微細をあらわす *sūkṣma* とが合璧して深妙と訳されている。一般には微妙と漢訳されているが深妙なる訳は、「法華経」に多く、羅什はこちらと微妙とを使い分けている。この妙なることばが法なる *dharma* にかかるから妙法になるのは自明であろう。「*gābhīrā vipuru sūkṣma prāptu dharmo(a) cintatu buddhavarō yathā samudrah.*」(深く広く深妙な法を得た最勝の仏陀の心は海のようなである)ここに最勝の仏 *buddha-varo* が、前記行巻の最勝につながるかと仮定せば、親鸞の釈は、梵語原典に近い。それとも慣用として、偶然であろうか。いずれにしても、深妙は単なる形容にとどまらず、法をあらわし、また、仏をあらわすことには違いない。と同時に、最勝もまた、十二光に準じて阿弥陀仏のことになる。このように親鸞は、教法を単に *dharma* とだけ見ずに、阿弥陀仏になぞらえている。たとえば、不可思議は光を付して「(南無)不可思議光仏」つまり阿弥陀仏である。親鸞の妙観は、不可思議であり、法身仏 *dharma-kāya* であろう。行巻では「弘誓一乗海……不可思議の至徳を成就せしめたまえり」の後文に「諸妙功德広無辺なるがゆえに、なお大車のごとし。あまねくよくもろもの凡聖を運載するがゆえに、なお妙蓮華のごとし」とある。なお、浄土の妙法たる弘誓の一

乗海は、仏身にとどまらず以下、次のような形容で詠嘆されている。実に具象的である。「善見藥王」「勇將幢」「利鋸」「利斧」「善知識」「導師」「湧泉」「蓮華」「疾風」「好蜜」「正道」「磁石」「閻浮檀金」「伏藏」「大地」「日輪」「君王」「嚴父」「悲母」「乳母」「大水」「大火」「大風」等。

親鸞は、浄土の教法をたとえるのに、妙なる表現を用いているが、それが衆生に向つては、仏となり、菩薩となり、王となり、父母となり、物質となり、物質的天然現象となるのである。

浄土教の方便であろうが、真実への道であろう。「無量寿經」上巻には、浄土の莊嚴が説かれているが、ここでの樹木が微風に揺れ「無量の妙法を演出する」とある。「音楽即妙法」なのである。「其声流布徧諸仏国、其聞音者得深法忍、住不退転」という。この項は、親鸞の「浄土三経往生文類」に引用されている。音響もまた妙法を伝えるのである。同じく上巻には、音声の世界を挙げ、往生人には歓喜無量であることが説かれている。浄土の音声は「自然妙声随其所应莫不聞者、或聞仏声、或聞法声、或聞僧声、或寂靜声、空無我声、大慈悲声、波羅蜜声、或十力無畏、不共法声、諸通慧声、無所作声、不起滅声、無生忍声、乃至甘露灌、衆妙法声、如是等声、称其所聞歡喜無量」とある。仏法僧、寂靜、空、無我、大慈悲、波羅蜜、十力・無畏・不共法、六神通、無所

作、不起滅、無生忍、甘露灌頂といった「妙法」の音が、浄土では昼夜の別なく流れているのである。音響もまた「妙法」なのであることが知られる。と同時に、ここでの「妙法」は、明かに浄土の教法を意味する。無論仏身でもなく、物質的天然現象ではない。まさに「深法忍」の境をいうのであろう。

「阿弥陀經」には、「妙法」なる記述は全く見当らない。その代り、微妙なる表現がある。「彼仏国土微風吹動諸宝行樹及宝羅網出微妙音」とある。ここでも浄土の音が説かれ、この後、「譬如百千種樂同時俱作聞是音者、皆自然生念仏念法念僧之心」とつづく。「無量寿經」上巻の「妙法声」と対応されよう。「妙法蓮華經」の訳者鳩摩羅什の訳經であることの関連は、今後の研究課題であらう。

さて、妙なる世界ともいふべき浄土は、法の世界である。報土という。しかしながら、浄土教は、あくまで阿弥陀仏の本願を信じて、念仏し、浄土往生するのが体である。親鸞は「教行信証」において真仏土と化身土を分立しているが、称名念仏によつて感得せる浄土観は、成仏ではなく、それは正定聚を得ることである。浄土教信者は、称名念仏により仏になるわけではなく、浄土に生ずるのである。「浄土和讃」に「如来すなわち涅槃なり 涅槃を仏性となづけたり 凡地にしてはさとられず 安養にいたりて証すべし」と謳っている。安養浄土に往生して悟りの境地に達するのである。現世

での念仏は、正定聚を得るといふ。法然以来、日本浄土教は、往生と成仏定義がかなり曖昧に使われている。親鸞の往生は、不体失往生だが、それは正定聚を得るに他ならない。

浄土教の妙法とは、そのことを離れては考えにくい。妙法の浄土とは、前記の絵画的音楽的なものではなく、あくまで法身の、真如法性の浄土である。曇鸞の「浄土論註」下巻では「彼浄土是阿弥陀如来清浄本願無生之生」といつている。

だが妙法が、真如法身ならば色も形もなく下根の人間の救済はあり得ない。そこで、いわゆる俱会一処の浄土をしつらえ、「阿弥陀経」の世界が現出し、方便として浄土が、あたかも実在するかのように具象化されていない。妙法は、元来法体であつて具象化されていない。その矛盾を埋めるものが、親鸞の独自の仏身観である。そこでは、法は、動き働いていく。これは妙法から妙用に進展しているのである。そこに本願他力の道が開かれたといえよう。晩年の親鸞は、自然法爾の境に達し、阿弥陀仏は「自然のようをしらせんりよう（料）なり」といつている。また「無上仏ともうすは、かたちもなくまします。かたちもましまさぬゆえに自然とはもうすなり」と記し、浄土教の妙法から妙用に進み、自然を「おのずからしからしむる」と釈している。妙法が、単に法にとどまらず、無知なる衆生救済のはたらきに前進するところが浄土教の面目である。親鸞が、妙法を仏や菩薩や父

母や物質的天然現象に仮託した意義はここにあるのだ。日本仏教的演繹といえるかも知れないが、他力教の特質である。それは、あたかも白蓮華 puṇḍarikā が空性の象徴としての妙法經典に帰依した日蓮とは対象的ではあるまいか。

- 1 Sūhavarivya 足利本参照。
- 2 この語はなが「難思光」の意。
- 3 梵語の gābhira また gambhira に当るが、この単語は Prakrit か？
- 4 金子大栄編「真宗聖典」
- 5 但し「略本」
- 6 「諸經意弥陀仏和讃」
- 7 「教行信証」信巻「現生十種の益……十者入正定聚益也。」行巻「曇鸞大師云『入正定聚之數』仰可憑斯專可斯也」
- 8 「教行信証」真仏土巻に「涅槃經」の引用あり。「真解脱者不生不滅」拙文「教行信証」における空性の問題」（印度学仏教学研究第二十八巻第一号）

（仏教思想研究所長）